



アジア研究センター 共同研究

「植民地国家と近代性：アジア諸国を中心とする比較研究」公開講演会報告

実施日時：2021年1月21日(木) 13:00～17:00

泉水 英計

米国が沖縄を軍事拠点としたことにより、沖縄社会は米軍基地ととりわけ深い関係をもつことになった。米軍基地との関係は経済的なものばかりでなく文化的な影響や人的交流にも及ぶ。このような人的交流のひとつが基地関係者の男性と沖縄人女性が結ぶ関係である。研究会の二つの発表はともに、この男女関係から生れた人々に焦点をあて、そこから戦後沖縄史にあらたな光をあてるものであった。

野入直美氏の発表「沖縄のアメラジアン—本土復帰前後の『混血児調査』を中心に」で論じられたアメラジアンとは、海外に展開した米軍の将兵と現地の女性との間に生まれた子供たちを指す冷戦期に出来た言葉である。沖縄では現在でも毎年250人のアメラジアンが出生している。在沖米軍基地の問題として性暴力があるが、野入氏は、アメラジアンの存在のすべてを性暴力と結び付けるのは、基地反対運動のなかで生成された言説であると指摘、「混血児」調査の変遷はそれぞれの調査がその時代の文脈に方向づけられたものであったことを示した。たとえば、1955年の調査で、父親の「人種」に関心が向けられたのは、「黒人系の子供たち」がアメリカ人との養子縁組にて渡米し始めたことが背景にあった。1975年の調査で、

母親の職業について、それ以前のサービス業や店員、軍雇用という分類ではなく、ホステスやウェイトレス、メイドといったジェンダー化された分類を取り入れたのは、「混血児」を売買春と結び付け、基地周辺歓楽街の女性を社会問題として明るみに出そうとする意図が背景にあった。施政権返還後は、「混血児」支援運動は無国籍の解消が主要課題となった。1985年の国籍法改正により、日本で日本人母が生んだ子は国籍が取得できるようになったが、その後も残る問題があり、アメラジアンの母親たちは1998年にアメラジアンスクール・イン・オキナワを設立、野入氏は理事としてその活動を指揮している。

このような沖縄の「混血児」の父親は米国人ばかりではない。とくに施政権返還前には、米軍基地で就労するフィリピン人を父とする「混血児」も多かった。ズルエタ氏の発表の「Transnational Identities on Okinawa's Military Bases」というタイトルは、「二世」と自称するこのような人々の帰属意識について、インタビューによる個人史を織り交ぜつつ論じた同氏の近著のタイトルである。ズルエタ氏は、研究会ではとくに、フィリピン人を父とする人々が、施政権返還後の沖縄で父と同じ職業に就く米軍基地労働者

の再生産の条件について説明した。「二世」は出生時の状況すなわち両親が正式に結婚しているか否かにより国籍が異なり、生育条件すなわち沖縄で育ったかフィリピンで育ったかにより言語能力も異なるが、それぞれの法的身分と文化資本を援用し沖縄とフィリピンを往還しつつその人生を歩んだ。米軍基地が、米国人と現地人に限定されないトランスナショ



ナルな事象であることをよく示すとともに、「故郷」や「～人」という考え方の複数性を強く印象づける説明であった。

野入氏とズルエタ氏のそれぞれの発表の後には、共同研究メンバーの全員がめいめいの専門分野と研究地域を踏まえたコメントを返し、一部の一般参加者もこれに加わった。両氏それぞれの応答の後に、活発な質疑応答が予定時間一杯まで続けられた。

(所員 神奈川大学 経営学部教授)

